Doc. 2488 Evid

Folder 9

(43)

INTERNATIONAL PROSECUTION SECTION

Doc. No. 2487 - 2488 24 July 1946

ANALYSIS OF DOCUMENTARY EVIDENCE

DESCRIPTION OF ATTACHED DOCUMENT

Title and Nature: Investigations Re Trade of French Indo-China by East Asia Research Institute

Date: (see below) Original (x) Copy ( ) Language: Japanese

Has it been translated? Yes ( ) No (x)
Has it been photostated? Yes ( ) No (x)

LOCATION OF ORIGINAL

Document Division

SOURCE OF ORIGINAL: East Asia Research Institute, TOKYO

PERSONS IMPLICATED:

CRIMES TO WHICH DOCUMENT APPLICABLE: Aggression, Indo-China; Preparation for War, Economic

SUMMARY OF RELEVANT POINTS

Doc. No. 2487

Investigations re Trade of French Indo-China, 10 Sep 41. (A study of potentialities of importation of various goods, mainly textiles, by French Indo-China ie French Indo-China's possibilities as a market for Japanese manufactured textiles.)

Doc. No. 2488

Investigations re Trade of French Indo-China 25 May 42. (A study of the export capability, mainly pertaining to rice, of French Indo-China, of rice producing areas there, and of potential markets.)

Analyst: 2d Lt Blumhagen Doc. Nos. 2487 - 2488

#2488

Proj. No. –
S.A. No. 10044-D-I
Sack No. 12
Item No. 7

Lumi SASAKI

Investigations regarding the Trade in French-Indo-China

by East Asia Research Institute

May 25, 1942

I Investigation regarding the Exportation Capability of French-Indo-China ; Rice

1. Productivity of Rice in French-Indo-China

2. Rice Productive Localities in French-Indo-China

3. Development of Rice Exportation from French-Indo-China

4. Localities of Rice Exportation in French-Indo-China

5. Amount of Rice Exportation Classified by Kinds.

6. Countries to Which the Rice is Exported and the Amount Thereof

To French, Chinese and Japanese Markets

Appendix

I List of Rice Exportation Classified by Kinds

II List of Quantities of Rice Exported from French-Indo-China and the Countries to Which

It is Exported

III List of Prices of Exported Rice from French Indo-China and the Countries to Which It is Exported

Proc. No.
S. A. No. 10044-D-7
Sack No. 12
Item No. 7-6

資料課

資料丁第二十號ノ二C

佛領印度支那貿易に關する調査（其二）

10044D
Sack 12
#2488

（昭和十七年三月印刷）

東亞研究所

E
5320

委託年月　昭和十六年四月
完了年月　昭和十七年二月
擔當者　谷口吉彦

54764

第三　佛印米の輸出力に關する調査　目次

一、佛印米生產力の趨勢……一
二、佛印米生產力の地方的分布……四
三、佛印米輸出力の發展……一一
四、佛印米輸出力の地方的分布……二〇
五、佛印米輸出力の品種別……二四
六、佛印米輸出力の國際的分配……二八
(一)フランス市場　(二)支那市場　(三)日本市場……三一
附錄第一、佛印米品種別輸出表……四二
附錄第二、佛印米輸出數量及その輸出先別表……四七
附錄第三、佛印米輸出價額及その輸出先別表……五二

以上

一、佛印米生産力の趨勢

佛領印度支那に於ける米の生産量は、ロ|マの國際農業統計年鑑の示すところによれば、一九三四|三五年に五百五十萬瓲、一九三五|三六年に六百萬瓲、一九三六|三七年に六百三十萬瓲であり、年平均約六百萬瓲約四千万石と推定される。世界の米の總生産額（推計）は約一億四千萬瓲であり、その九割すなはち一億二千萬瓲がアジアに於いて生産されてゐるわけであるが、佛印の生産額はその四。八%、世界全生産額の四。四%に過ぎず、支那（滿洲を含まず以下同じ）の四千八百萬瓲、英領印度の四千萬瓲には勿論、日本内地の千二百萬瓲、ビルマの七百萬瓲にも及ばない。今、一九三六|三七年に於ける各國の米生産量を示せば次のごとくである。（十キンタル＝一瓲）。

支那	四八〇、一四九（千キンタル）	
印度	四二五、三九七	
日本内地	一二四、九八一	
ビルマ	七一、九五六	
印度支那	六三、一六二	
朝鮮	三五、九四八	

泰國	三三、七九九
フイリッピン	二二、四五三
臺灣	一七、七四〇
其他	一八、三六四
アジア合計	一二九三、九四九
世界總計	一四一五、八四九

（ローマ、國際農業統計年鑑一九三七―三八年、より算出）

次に、これら各國の單位面積當り（一ヘクタール）の米の生産量を同じく一九三六―三七年の統計について見れば、次の數字が得られる。

支那	二六・五キンタル
印度	一四・五
日本内地	三九・三
ビルマ	一四・一
印度支那	一一・二
朝鮮	二二・六
泰國	一五・二
フイリッピン	……
臺灣	二六・〇
アジア平均	一五・九

即ち、米生産の絶對量に於いて佛印はアジア諸國中第五位を占めるとはいふものゝ、單位面積當りの生産力に於いては最下位に落ち、アジア全體の平均生産力一五・九キンタルに比しても遙かに劣つてをり、最高

位を占める日本内地の約四分の一に過ぎず。東亞市場に於ける競爭相手たる泰米、ビルマ米に比しても尚ほ遙かに少ない狀態である。このことは佛印米に於ける今後の問題の一つが耕地面積の擴大―佛印の耕地面積は日本内地の約[illegible]分の一―よりも寧ろ單位面積當りの增收によつてその生産力の發展を圖るに在ることを示してゐる。

さて次に佛印米生産の最近十年間の發展をその耕地面積と生産量とに就いて見ようぞ。

年次	生産量（千ヘクタール）	耕地面積（千ヘクタール）	（ヘクタール當り生産量）
一九二七―二八	六[illegible]三九一	五四七四	一一・八
一九二八―二九	五七四七八	五四九一	一一・二
一九二九―三〇	五九三八一	五六八〇	一〇・五
一九三〇―三一	五九七九七	五八二七	一〇・三
一九三一―三二	五六一二六	五三〇六	一〇・六
一九三二―三三	五七九三五	五四七四	一〇・六
一九三三―三四	五八三三五	五三八四	一〇・八
一九三四―三五	五五〇八五	五三三六	一〇・三
一九三五―三六	六〇四六三	五四六〇	一一・一

これによつて分かるやうに、佛印米の生産量は一九三〇年以後の農業恐慌の打撃を別とすれば、最近十年間に於いて殆んどなんらの增加を示してゐない。近年に及んで漸く六百萬瓲臺を實現してはゐるものゝ、尚一九二七―二八年の六百四十萬瓲には及ばない狀態である。耕地面積も亦全期間を通じて、五百五十萬ヘクタール程度を上下してゐてその間に著しい變動を認め得ないし、從つて單位面積當り收獲量も依然たる停滯を記錄してゐる。このことは佛印に於ける米生産の大部分が土人の傳統的農業によつて行はれ、華僑とか高利貸とかの支配下に從屬せしめられてゐる事實に照應するものである。

二、佛印米生産力の地方的分布

佛印米の生産は、主として北部の紅河流域の交趾支那デルタとの二大米作地帶に於いて行はれる。米田總面積は佛印總面積の七%に當つてゐるが、その內譯を示せば次表の如くである。

佛印	安南	交趾支那	米	一九三五年	一〇〇・〇
				一九三六年	一〇〇・〇
			其他穀物	一九三五年	〇・〇〇
				一九三六年	〇・〇〇
		カンボジヤ	米	一九三五年	〇・〇〇
				一九三六年	〇・〇〇
			其他穀物	一九三五年	〇・〇〇
				一九三六年	〇・〇〇
		ラオス	米	一九三五年	〇・〇〇
				一九三六年	〇・〇〇
			其他穀物	一九三五年	〇・〇〇
				一九三六年	〇・〇〇
	合計		米	一九三五年	一〇〇・〇
				一九三六年	一〇〇・〇
			其他穀物	一九三五年	〇・〇〇
				一九三六年	〇・〇〇

佛印米耕作面積　單位千ヘクタール

		一九三八―三九	一九三九―四〇	一九四〇―四一	一九四一―四二	一九四二―四三	一九四三―四四	一九四四―四五	一九四五―四六	一九四六―四七
安南	面積	九七七	一〇五〇	一〇一九	九二九	九六九	九五九	九三二	九四一	一〇七五
	%	一七・七	一八・五	一九・〇	一七・五	一七・七	一七・八	一七・五	一七・三	一九・〇
カンボヂヤ	面積	六三三	六八六	六八〇	六一五	六九〇	六三四	七一四	六九四	六八四
	%	一一・三	一一・七	一一・六	一一・六	一二・六	一一・五	一二・三	一二・七	一二・〇
交趾支那	面積	二一一四	二一一三	二一九八	一九九六	二〇五〇	二〇〇〇	二〇六四	二一一三	二一六四
	%	三八・四	三七・〇	三七・七	三七・六	三七・五	三七・〇	三八・七	三八・七	三八・五
ラオス	面積	四四二	四五〇	四六〇	四七〇	四六〇	四六一	四一三	三八二	四〇〇
	%	八・〇	八・〇	八・〇	八・〇	八・〇	八・〇	七・七	七・〇	七・〇
トンキン	面積	一三三五	一三八一	一三八〇	一二九六	一三〇五	一三四一	一二一三	一三三二	一三二一
	%	二四・三	二四・三	二二・六	二四・四	二四・〇	二四・六	二二・七	二四・四	二二・四
合計	面積	五四九一	五六八〇	五八二七	五三〇六	五四七四	五三八五	五三三六	五四六一	五六四四
	%	100・0	100・0	100・0	100・0	100・0	100・0	100・0	100・0	100・0

これによつて明らかなやうに、米田總面積五百五十萬ヘクタールの内交趾支那の米田面積が二百萬ヘクタールで約四〇%、東京の米田面積が約二五%で合計六五%をこの二領で占めてをり、殘りの三五%を安南、カンボヂヤ、ラオスがこの順序に分有してゐる。この關係は、近年安南に於いて僅かの增加が見られる以外には、九年間を通じて殆んど不動である。

交趾支那と東京の米作が佛印米生産の主力をなすといふこの關係は、次の粗生産量を示す統計によつて更に明瞭に窺はれるとともに、特に交趾支那の産米量は世界恐慌後の期間に於いて絶對的にも相對的にも上昇してゐる。

	佛印米	安南	カンボヂヤ	交趾支那	ラオス	トンキン	合計
生産高	一九五五	一九七五	一六〇〇	三四九九	四〇〇	一二五〇	一〇〇・〇
生産指數	一九三六	一一〇〇	一〇〇	一〇三・五	一〇〇	一一二・五	一〇〇・〇
生産百分比	一九・七	一一・三	一・〇	三四・九	〇・四	一二・五	一〇〇・〇

佛印米生産量（籾）單位千キンタル

		一九二八―二九	一九二九―三〇	一九三〇―三一	一九三一―三二	一九三二―三三	一九三三―三四	一九三四―三五	一九三五―三六	一九三六―三七
安南	生産量	九一五四	九三五〇	八九六〇	七三三〇	九四四〇	九九四〇	九三〇〇	九七三一	九二八〇
	%	一六・〇	一五・七	一五・〇	一三・〇	一七・〇	一七・〇	一六・七	一六・〇	一四・七
カンボヂヤ	生産量	六〇六四	六五〇七	六九八四	四八五四	七七〇〇	四六六五	五一五〇	六〇二〇	五二四〇
	%	一〇・六	一〇・九	一五・〇	八・六	一三・三	八・〇	九・三	九・九	八・三
交趾支那	生産量	二二一五七	二二六四七	一八五四六	二二六〇六	一九三三〇	二二四七二	二二二五一	二四四七九	二〇五〇〇
	%	三六・八	三六・四	三〇・一	四〇・〇	三三・三	三八・五	四二・〇	四〇・五	四八・三
ラオス	生産量	二四〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二五〇〇	二六二〇	二二六〇	二七二〇	二一八〇
	%	五・九	五・五	五・五	五・七	六・〇	六・二	五・九	四・五	三・四
トンキン	生産量	一七〇三	一八五七	二〇〇七	一八〇三六	一七九八五	一七六三八	一四二二四九	一七五〇二	一五九六二
	%	三〇・一	三〇・一	三三・四	三二・〇	三〇・一	三〇・一	二五・八	二八・九	三〇・〇
合計	生産量	五七四七八	五九三八一	五九七九七	五六一二六	五七九四五	五八三三五	五五〇八五	六〇四六三	六二一六二
	%	100・0	100・0	100・0	100・0	100・0	100・0	100・0	100・0	100・0

即ち、佛印の粗生産量の内、その七〇―八〇%は交趾支那および東京によつて占められ、安南・カンボヂヤ・ラオスの地位は耕地面積に於いて見た場合よりも更に低いものがあることが知られる。さらに一九二八―二九年と一九三六―三七年とを比較すれば、生産量の全體に對する割合に於いて、安南・カンボヂヤ・ラオスが孰れも低下してゐるに對して、東京は三〇%を維持し、交趾支那は逆に三六・八%から四八・三%に增加してゐる。絶對量について見ても、安南が不動である以外は東京・カンボヂヤ・ラオス共に減退してゐるに對して、交趾支那は一九二八―二九年の約二百萬瓲から恐慌時の僅かの減退を除いては、一九三四―三五年の二百三十萬、一九三五―三六年の二百四十萬、一九三六年―三七年の三百萬瓲と大體順調な經過を示してをり、一九二八―二九年に比べて一・五倍に增加してゐる。

以上の耕地面積と生産量の二つの統計から、一ヘクター當りの收獲量（キンタル）を算出すれば次のやうに成る。（註　一キンタル＝百瓲）

	一九二八―二九	一九二九―三〇	一九三〇―三一	一九三一―三二	一九三二―三三	一九三三―三四	一九三四―三五
安南	九・四	八・九	八・一	七・九	九・七	一〇・四	九・九
カンボヂヤ	九・七	九・五	一三・二	七・九	一一・三	七・二	七・七
交趾支那	一〇・〇	一〇・二	八・四	一一・三	九・四	一一・二	一一・三
ラオス	七・七	七・三	七・二	七・〇	七・六	七・九	七・九
東京	一三・三	一三・五	一四・五	一三・九	一三・八	一三・二	一一・七
全領平均	一〇・五	一〇・五	一〇・三	一〇・六	一〇・六	一〇・八	一〇・三

	一九三五―三六	一九三六―三七	一九三七―三八
安南	一一・〇	八・六	……
カンボヂヤ	八・七	七・七	……
交趾支那	一一・六	一四・一	一三・三
ラオス	七・一	五・四	……
東京	一三・一	一二・一	……
全領平均	一一・一	一一・二	……

單位面積當りの生産量に於いて増加を示してゐるのは、五領中交趾支那のみであつて、一九二八―二九年以來恐慌の影響を除いて一〇キンタルから一三キンタルまで僅かながら増加してゐる。之に比して、東京地方の單位面積當り生産量は停滯乃至は減少の傾向を示してゐるものであるが、これは同地方住民の著しい貧困とそれによる生産技術の未發達を反映するものであらう。併しながら、交趾支那の面積當り收獲量一三キンタルも、之を世界的水準から見れば甚だ劣つてゐることは、既に前述した。

佛印の米作が日本と同じく小農經營でありながら、このやうな低位に在る理由は技術的改良とか施肥とかが行はれてゐないことに基くものであり、それは更に根本的には、輸出作物としての米の商品化とともにフランス本國或は華僑の支配力の滲透によつて、その間の利潤が奪ひ去られて再び還流しなくなつたことに由來するのであり、植民地農業の特殊な性格につながるものと言ひ得るであらう。

三、佛印米輸出力の發展

産米量の上から言つて、佛印米が全世界産米量の約四%に過ぎないことは既に述べたが、次にその輸出量を同じく國際農業統計年鑑に據つて檢討しよう。

世界の總輸出量は一九三三年に八百二十萬瓲、一九三三年に八百萬瓲、一九三四年に八百三十萬瓲、一九三五年に八百萬瓲、一九三六年にはやゝ減少して七百六十萬瓲となつてゐるが、大體八百萬瓲と考へて大差はない。この内、佛印からの輸出量は米・粃を合せて約百五十萬瓲で世界總輸出量の五分の一に相當し、泰國の百五十萬瓲と竝んで世界最大の輸出地たる地位を占めてゐる。即ち、産米量に於いて世界の四%、アジアの第五位に過ぎない佛印は、その輸出量に於いては世界の二〇%、アジアの第一位又は第二位を占めてゐるのであつて、佛印米の輸出が世界市場に於いて極めて大なる重要性をもつてゐることが知られる。いま、一九三六年度に於けるアジア各國の産米量に對する輸出量の割合を算出すれば次の如くなる。

國別	輸出量	生産量に對する割合
支那	三一四(千キンタル)	〇・〇四%

印度	一三、八六二	三。二五	
日本內地	二五六	〇。〇二	
佛印	一四、一四九	二二。四〇	
朝鮮	一二、〇七三	三二。六六	
泰國	一四、一六五	四一。九〇	
臺灣	六、八七四	四六。六二	

次に、佛印に於ける生産量と輸出量及びその割合の發展を、印度支那外國貿易一覽表から算出するならば次の結果が得られる。

佛印米生産量と輸出量との割合　　單位一瓲

	生産量	輸出量	生産量ヲ一〇〇トスル輸出量
一九二六年	五、八四二、八〇〇	一、五九七、三一一	二七。一
一九二七年	六、〇六六、二〇〇	一、六六五、三五四	二七。四
一九二八年	六、四三九、一〇〇	一、七九七、六八二	二七。一
一九二九年	五、七四七、八〇〇	一、四七一、六四三	二五。五
一九三〇年	五、九三八、一〇〇	一、一二一、五九三	一八。九
一九三一年	五、九七九、七〇〇	九五九、五〇四	一六。四
一九三二年	五、六一二、六〇〇	一、二一三、九〇六	二一。六
一九三三年	五、七九三、五〇〇	一、二八八、八九八	二二。二
一九三四年	五、八三三、五〇〇	一、五二八、五五三	二六。二
一九三五年	五、五〇八、五〇〇	一、七六五、五八六	二一。二
一九三六年	六、〇四六、三〇〇	一、七八〇、八五三	二九。六
一九三七年	六、三一六、二〇〇	一、五四七、二五六	二四。五

世界恐慌の影響による輸出不振の時期を別にすれば、生産量に對する輸出の割合は。大體二六。七%を維持してゐるやうである。なほ、第一次世界大戰の前年より最近までの佛印米輸出力の趨勢を示せば次の如くである。價格單位は一九三〇年に、一ピアストル＝一〇法と定められてより以後はフランス建を以つて示されてゐるが、便宜上これをピアストルに換算した。（印度支那外國貿易一覽表 Tableau du Commerce Exterieur de l'Indochine, Année 1934 Gouvernement Général de l'Indochine, Hanoi. および印度支那統計年鑑 Annuaire Statistique de l'Indochine により作製）。

佛印米輸出力統計表

	數量（瓲）	價額（千ピアストル）
一九一三年	一、二八六、八〇四	六九、六〇〇
一九一四年	一、四一八、九六八	七一、九〇〇
一九一五年	一、三七三、二三九	七三、八〇〇
一九一六年	一、三四五、三五九	六八、九〇〇
一九一七年	一、三六七、四八八	六〇、〇〇〇
一九一八年	一、六一九、七一五	九〇、八〇〇
一九一九年	九六六、八六六	九二、五〇〇
一九二〇年	一、一八八、八二八	一二九、五〇〇
一九二一年	一、七二二、四一七	一二〇、四〇〇
一九二二年	一、四三九、九五五	九六、〇〇〇
一九二三年	一、三三三、九三〇	一〇四、八〇〇
一九二四年	一、二三〇、二〇六	一一〇、三〇〇
一九二五年	一、五一九、六四九	一二八、四〇〇
一九二六年	一、五九四、一一一	一二六、一〇〇
一九二七年	一、六六五、三五四	一四四、八〇〇

一九二八年	一、七九七、六八二	一四二、一〇〇
一九二九年	一、四七一、六四三	一四八、四〇〇
一九三〇年	一、一二二、一五九、三	一一九、八七二
一九三一年	九五九、五〇四	六二、三四四
一九三二年	一、二一三、九〇六	六〇、二九一
一九三三年	一、二八八、八九八	四七、八八七
一九三四年	一、五二二、八五三	四五、一一二
一九三五年	一、七六五、五八六	六六、五七四
一九三六年	一、七八〇、八五三	七八、一一七
一九三七年	一、五四七、二五六	一〇九、三八一
一九三八年	一、〇六四、六四三	一〇一、九八六
一九三九年	一、六九二、一五四	一三八、五八八
一九四〇年（上半期）	一、二七八、五一七	一四〇、九八三

これによつて佛印米輸出の消長を見るならば、それが世界經濟自體の動きに大體追隨してゐることを認めることが出來るであらう。この事は

東亞研究所藏書

佛印米の生産自體が輸出向き商品生産として行はれてゐる事情を說明してゐると共に、それが世界の米輸出に於いて占めてゐる重要な地位―八百萬瓲中の百五十萬瓲―を反映してゐるものである。然らば、佛印の輸出貿易全體の推移と米輸出の推移との關係はどうであらうか。一九一三年を基準とする兩者の變動を次に掲げよう。（印度支那統計年鑑一九一三―二二より一九三七―三八まで及び印度支那外國貿易統計月報一九四〇年七月により算出す）

佛印の總輸出（價額）（一九一三年を一〇〇とす）

一九一三年	一九一四年	一九一五年	一九一六年	一九一七年	一九一八年	一九一九年	一九二〇年	一九二一年	一九二二年	一九二三年	一九二四年	一九二五年	一九二六年	一九二七年	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年
一〇〇	一〇〇	八一	八一	九九	一一三	二一〇	一二二	一六五	一六三	一三六	一六六	一九〇	二二二	二〇八	一八六	一三一	一八四	二〇二	二四八	一八九（七月末迄）	七九	七二	七二	七五	八二	一二一

佛印米の輸出（價額）

一九一三年	一九一四年	一九一五年	一九一六年	一九一七年	一九一八年	一九一九年	一九二〇年	一九二一年	一九二二年	一九二三年	一九二四年	一九二五年	一九二六年	一九二七年	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年
一〇〇	一〇三	一〇六	九八	八六	一三〇	一一三	一八五	一七三	一三八	一四九	一五八	一八四	二三〇	二〇七	二〇三	二一三	一七一	八九	八六	六八	六四	九五	一二
一九三七年	一九三八年	一九三九年	一九四〇年（七月末迄）																				
一五六	一四六	一九八	二〇一																				

これに依つて佛印の總輸出の年次別變動が、米の輸出の變動と如何に一致してゐるかを知ることが出來る。佛印の總輸出額は大體に於いて三〇億フラン前後であり、米の輸出額は一五億フラン程度であり、六億五〇％に相當してゐるから、この事からも米の輸出が佛印總輸出の主力をなしてゐることは明瞭である。たゞ、近年に於いてはゴムと玉蜀黍の輸出がやゝ進出して來たやうであるが、依然として米の占める主要地位には變りはない。この事情は次の表に於いて確められる。（印度支那統計年鑑一九一三―二二以後に據る）

佛印の商品別輸出（比率）

	一九一三年	一九一四年	一九一五年	一九一六年	一九一七年	一九一八年	一九一九年	一九二〇年	一九二一年	一九二二年
米及副産物	六一・七	六六・五	六五・七	六三・二	七〇・六	七六・一	六七・一	七〇・〇	七四・五	七〇・四
ゴム	〇・三	〇・三	〇・六	一・〇	一・八	〇・九	二・八	三・六	二・三	三・三
石炭	二・三	二・四	三・二	三・二	二・三	一・八	二・〇	二・四	二・一	二・二
魚類	四・二	四・二	四・〇	三・三	三・〇	二・四	二・八	二・五	二・一	二・一
玉蜀黍	五・六	四・三	二・六	一・七	〇・五	二・四	三・八	〇・三	一・八	一・六
其他	三五・九	三三・四	三三・九	二八・六	二一・八	一六・四	三三・五	三三・三	二八・二	二〇・四
	一九二三年	一九二四年	一九二五年	一九二六年	一九二七年	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年
米及副産物	五六・六	六二・四	六三・五	六八・二	六五・〇	六八・〇	六五・三	六五・一	五四・三	五九・二
ゴム	二・五	四・四	七・八	七・三	六・四	三・五	四・三	三・四	三・六	二・六
石炭	三・三	三・〇	三・〇	二・九	三・二	三・四	四・〇	五・四	八・〇	六・五
魚類	七・三	六・八	四・一	三・六	四・六	二・四	四・五	五・三	五・三	五・三
玉蜀黍	〇・九	〇・六	一・二	一・二	一・四	三・一	三・八	三・三	三・六	七・三
其他	二六・六	二六・四	二〇・四	一六・八	一九・四	一七・四	二〇・三	一八・三	二五・六	一九・一
	一九二三年	一九二四年	一九二五年	一九二六年	一九二七年	一九二八年				
米及副産物	四七・一	四六・六	四二・一	四四・七	四二・五	三五・九				

ゴム	五・五	九・四	一〇・五	一四・三	一八・〇	二一・八				
石炭	六・三	五・六	五・三	四・七	三・五	〇・五				
魚類	六・二	五・一	四・〇	三・三	二・五	二・五				
玉蜀黍	一五・二	一九・七	一一・二	一七・七	一七・五	一八・〇				
其他	一九・九	一三・六	二六・〇	一五・三	一六・〇	二一・三				

これによつて知り得ることは次の諸點である。

一、全期間を通じて米の輸出が壓倒的優位を保持してゐること。

二、全期間を通じて主要輸出品たる五品目が七五―八〇％を占めて、甚しい集中傾向を示してゐること。殊に米。ゴム。玉蜀黍の三品目に於いてこれが著しいこと。

三、一九二一年に全輸出の七四％を占めた米の輸出が一九三〇年の恐慌以後は漸次的低落を見せて最近に及んでゐること。

四、これを補ふものとして、ゴム及び玉蜀黍が抬頭して來たこと。玉蜀黍は一九三三年以後、ゴムは一九三五年以後との傾向が顯著であること、等である。

ゴム及び玉蜀黍は本問題の範圍外ではあるが、簡單に觸れておくなら

ば、之等は孰れも輸出用作物として本國の利益を中心として奬勵される に至つたものであり、ゴムの發展は恐慌後の國際情勢の緊迫と關係をもち、玉蜀黍の增加は本國の食糧政策特に後述するやうに佛印米と本國產小麥との競爭の問題に繋がるものである。

以上、種々の數字により示したやうに、佛印米輸出の發展は、大體世界經濟の動向と軌を一にしてをり、第一次世界大戰中の沈滯・一九二〇年の恐慌・その漸次的恢復と一九三〇年の恐慌・その漸次的恢復と第二次世界大戰といふ過程を反映してゐることが知られる。その理由に就いては、簡單ながら既に上述したところである。

四、佛印米輸出力の地方的分布

佛印の米は西貢米と東京米とに二大別され、前者は主として交趾支那を、後者は東京地方をその主要生產地とすることは既に述べた。次には輸出に於いてこの兩者の孰れが重要であるか、或は又重要性の程度が如何なるものであるかを檢討しよう。

その前に先づ交趾支那および東京の米生產に於いて輸出量が如何なる割合を占めてゐるかを豫め知つておく必要がある。左表はこの割合を示

すものである。（印度支那外國貿易一覽表、及び日本貿易振興協會「佛領印度支那と貿易事情」により作製。）

		一九三六年	一九三七年	一九三八年
交趾支那	生產量	二、四四七（千瓲）	三、〇五〇	二、五七九
	輸出量	一、六六九	一、五〇九	一、〇二六
	生產ニ對スル輸出	六九％	四九％	三九％
東京	生產量	一、七五〇	一、五九六	一、六〇四
	輸出量	八〇	三七	三八
	生產ニ對スル輸出	五％	三％	二％

生產量に於いて東京は交趾支那の二分の一或は三分の二の地位を保持

してはゐるけれども、その輸出量が生産量に對してもつ割合に於いては交趾支那の約五〇％に比べて、僅かに五％足らずといふ狀態である。即ち交趾支那で生産される米はその過半が輸出に向けられ、東京で生産される米はその殆んどすべてが領内で消費されてゐると言ふことが出來る。尤も、交趾支那米輸出の割合も一九三六年以來、毎年一〇％づつその相對的地位を減じてゐるやうであるが、これはフランス本國の需要減と支那事變（一九三七年）の影響によるものと考へられる。

さて今度は佛印米の全輸出に於ける交趾支那米と東京米の地位如何の問題に移らう。

	一九三六年	一九三七年	一九三八年
交趾支那 輸出量	一、六九九、〇〇〇	一、五〇九	一、〇二六
交趾支那 比率	九六・三％	九六・八％	九六・四％
東京 輸出量	八〇	三七	三八
東京 比率	四・五％	二・三％	三・五％

佛印合計 輸出量	一、七六三	一、〇六四
佛印合計 比率	一〇〇・〇	一〇〇・〇

最近の三年間に於いて見ても、交趾支那米はかくの如く佛印輸出米中九六％を正確に維持してゐることが分かる。一九三六年の數字は交趾支那と東京の合計が佛印全體を超過してゐるので疑問であるが、交趾支那米が壓倒的に優勢であることだけは最早明瞭である。依つて、佛印の輸出米と言はれるときは、それは直ちに交趾支那米を指すものと考へられる。交趾支那米の輸出は又すべて西貢港に向つて行はれるが故に、通常これは西貢米の名を以つて呼ばれてゐる。佛印米輸出の問題は、從つて實は西貢米輸出の問題であると言ふことになる。尤も西貢米として輸出される米の内には交趾支那産米のみならず、カンボヂヤ南部の産米も含まれてゐることは勿論であり、之等の産米が東洋最大の精米工業都市たるシヨロンに集められて精白され、西貢港を經て輸出されるといふ組織に成つてゐる。

五、佛印米輸出力の品種別

輸出佛印米の品種は通常の稱呼に從へば、粳。玄米。白米。碎米。粉米の五種がある。各品種は更にその品質によつて種々に分類されてゐるが、輸出統計が示す區別は粳。玄米—(イ)三三%以上の粳を混入せるもの(ロ)三三%以下の粳を混入せるもの。白米—(イ)蒸さざるもの(ロ)蒸したるもの。碎米—(イ)蒸さざるもの(ロ)蒸したるもの。粉米の八種に分類されてゐる。而して品種別の佛印米輸出に於いて特徴的な事柄は、白米輸出が多いといふ事である。これは種々の理由に基づくものであらうが、精米業が僑の手によつて獨占されてゐるために粳或は玄米での輸出を行ふことが困難であることに基くものであらう。輸出用米は、精白して輸出するよりも、例へば玄米のまゝ輸出することのはうが、遙かに長期の保存に耐へうることは言ふまでもないところである。

		數量（キンタル）		價額（千フラン）	
粳	絶對量	一九三七年	一九三八年	一九三七年	一九三九年
		一四一四〇六四	三八〇三九四	三三六六四四七	七〇三四九
	比率	九・一	三・五	一九・三	六・四

玄米	絶對量	六四八〇八四	六九九八五九	九一四七八一	四四八五六
	比率	四・一	六・五	五・四	四・〇
白米	絶對量	九〇六二五五八	六七九五八七二	九七〇一七三三	七一九一四九
	比率	五八・五	六三・七	五七・五	六五・七
碎米	絶對量	三〇二五〇四二	一七六九〇七六	三一一六三五六	二〇八〇七七
	比率	一九・五	一六・六	一二・五	一九・〇
粉米	絶對量	一三二二八〇六	一〇〇一三二八	九三一二二三	五一四八五
	比率	八・八	九・七	五・三	四・九
合計	絶對量	一五四七二五五四	一〇六四六四二九	一六九二一五四〇	一〇九六八一六
	比率	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

（印度支那外國貿易統計月報より算出）

玄米の三三%以上の籾を混入せるもの、及び白米。碎米の蒸したものの分量ならびに價額は極めて僅少であるため、之を加算して玄米。白米。碎米なる區別の下に一括した。從つて玄米は大部分が三三%以下の籾を混入せるものであり、白米。碎米は蒸さざるものであると考へて差支へないか。

さて、上の數字の示すごとく、最近三ヶ年に於ける白米の輸出は一五〇萬瓲中の一〇〇萬瓲、約六〇%、價額に於いては更に多く一〇億フラン中の七億フランに相當してをり、大體との割合を恒常的に維持してゐる。之に次ぐものは碎米の輸出であつて、數量に於いて三ヶ年平均一六。二%、價額に於いて一五。三%を占め、之に次で籾。粉米。玄米の順となつてゐる。一九三九年に於いて籾の輸出が絶對的にも著しい增大を示してゐるのは、第二次世界大戰の勃發によつて、フランス向け輸出が停頓し東亜向輸出が增大したため近國向け輸出に適する籾の輸出が增大したことに由るのであらう。一般に米は價値に比して容量が大であつて、大なる船腹を必要とするため、輸送上の困難を伴ひ易いものであるが、このことは白米よりも籾に於いて著しいからである。

佛印米輸出が主として白米を中心として行はれてゐることは、之によつて明瞭となつたが、さきにも觸れておいた如く白米は長期の保存に適しないため、屢々それによつて遠隔地への輸出が阻害される缺點のあることに注意すべきである。例へば、ビルマ米の輸出業者はこのために獨逸への輸出に於いて籾のまゝの輸出を行つて、ハンブルグに於ける彼等の工場で精米するといふやり方を採つてゐると言はれる。

品種別輸出の詳細、とくにその輸出先別については附錄工を參照されたい。

六、佛印米輸出力の國際的分配

佛印米の輸出先別に於いて、フランス及びその屬領が最優位を占めてゐることは、本國の同化政策の上よりして容易に考へられるところである。之に續いて重要性をもつものは香港。印度。支那等の東亞に於ける市場であるが、の關係を次表に見よう。（印度支那外國貿易月報より算出）

一九三六年に於ける佛印米の主要輸出先別

	數量（キンタル）	同比率	價額（千法）	同比率
佛蘭西本國	九八三〇四三二	五五・〇八	四四四五二二	五八・〇二
香港	二三三四七〇四〇	一三・〇三	九三五三九	一二・〇二
佛領アフリカ	一〇八八四九〇	六・〇一	四九八八三	六・〇三
印度	九四〇〇六〇	五・〇三	二七二九四	三・〇五
支那	五四七七三〇	三・〇一	二四六〇五	三・〇二
比律賓	五七一八二〇	三・〇二	二八〇〇一	三・〇六
英國	三五一九〇二	二・〇〇	八六二五	一・〇一
和蘭	二一五二三二	一・〇二	七六八三	一・〇〇
レユニオン嶋	三三二九九五	一・〇九	一七九一一	二・〇三
シンガポール	三一九一九三	一・〇八	一四五九一	一・〇九
獨逸	一七五六二六	一・〇〇	六八〇六	〇・〇八

日本內地	二六九三七	〇・一	〇・二
其他	八八〇九八〇	五・二	五・七
總計	一七六三〇四四一	一〇〇・〇	一〇〇・〇

一九三六年は佛印米の輸出が恐慌から脫して、一九二七年、八年の水準を回復した年であつて、輸出數量約百七十萬瓲、價額にして七億六千萬法に達した時期である。フランスへの輸出はこの時に於いて數量にして百萬瓲で五五・八%、價額にして五八・二%で全輸出の過半を占めてをり、植民地を合せば大體六五%に及んでゐる。之に次ぐものは香港の一三・三%、價額に於いて一二・二%であるが、これはすべて支那南部地方へ再輸出されるものであるから、之を支那に加算して支那の佛印米輸入を算定すれば數量にして一六・四%、價額にして一五・五%となることになる。印度・フィリッピンが之に次いで三―五%を占め、その他の諸國は孰れも一―二%にしか當つてゐない。

從つて、以上の諸國をフランス及びその屬領、東亞、歐洲の三つに分類して見るならば左表のごとくなる。

	數量	價額
佛蘭西及び屬領	六三・八%	六六・八%
東亞	二六・八	二四・六
歐洲	四・二	二・九

之によつて分かる如く、佛印米はその過半がフランス本國および屬領に向けられてをり、二五%程度が東亞とくに支那市場に送られ、フランス以外の歐洲諸國への輸出は極めて微々たるものに過ぎない。いま最近までの國別輸出量の割合の變遷を見るに、次のごとくである。

（印度支那外國貿易一覽表および月表より算出）

佛印米輸出量の各國への分布（比率）

	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年	一九四〇年七月マデ
佛蘭西	五五・八	四三・三	五四・〇	三七・〇	七・一
香港	一三・三	二〇・七	一六・七	九・六	二四・〇
印度	五・三	〇・三	〇・三	二二・〇	八・四
佛領アフリカ	六・一	七・〇	〇・九	〇	〇・三
支那	三・〇	八・〇	一・八	五・一	一五・三
比律賓	三・二	〇	一・四	四・五	〇・五

國				
英國	二・〇	二・六	三・七	四・五
和蘭	一・二	一・四	〇・九	一・七
レユニオン嶋	一・九	一・七	一・九	〇
シンガポール	一・八	三・六	二・六	三・〇
獨逸	一・〇	一・二	一・八	〇・八
日本	〇・一	〇・一	〇	〇・四
其他	五・二	一〇・二	一四・一	二二・〇
合計	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

國				
英國	〇・三	〇	一・二	四・六
和蘭	〇	一・二	〇	〇
レユニオン嶋	一・二	四・六		
シンガポール				
獨逸	〇			
日本	二六・九			
其他	一一・四			
合計	一〇〇・〇			

一九三六年に五五・八%を占めたフランス本國が一九三七年には四三・二%へと減退したに對して、香港及び支那への輸出は孰れも五%から七%の增加を示してゐる。ところが同年に勃發した支那事變の影響を受けて、一九三八年には支那の輸入は香港を加へて二八・七%から一八・五%へと減少し、一方フランスは三六年の割合まで恢復した。然るに翌一九三九年以來の歐洲戰亂はフランスの輸入を著しく減退せしめるとなり一九三九年の三七%、四〇年の七%といふ記錄的な下降を示すに至つた。之に反して、支那の輸入は一九三九年から四〇年にかけて顯

著な恢復を見せ、佛印米輸出の約四〇%を占めて、フランスを遙かに凌いで第一位に昇るに至つた。これは支那事變によつて支那側の蒙つた食糧上の著しい打擊を示すものである。これと共に注意すべきことは、從來佛印米輸出の一%にも當らなかつた我國の輸入が一九四〇年に入つて二六・九%といふ著增を見せてゐることであつて、數量にして三十萬瓲で約二百萬石、價額にして四億法で約四千萬圓の輸入を行ふに至つてゐる。これは佛印米が最近吾國の食糧政策の上に於いて占めるに至つた重要性の程度を示すものである。

以下、主なる佛印米輸出市場を簡單に最近の狀況に重點を置いて觀察しよう。

(一)、フランス市場

一八九二年以來、フランスが印度支那に適用するに至つた同化關稅政策は、佛印を完全に自國工業の支配下に置かんとしたものであつて、フランス工業品の佛印への輸出および工業原料品のフランスへの輸入を無稅とすると共に外國からの佛印への輸出に對しては本國と同樣の關稅を附して之を防遏せんとしたものであつた。かうしたフランスの政策は勢ひ佛印米をフランス本國に集中せしめる傾向を生じたのであるが、一九

二九年に至つて（實施）されたキルシエ關稅は從來の本國中心主義を一層露骨に顯現したものであつて佛印に利害關係をもつ東亞の諸國特に日本。支那からの輸入品に禁止的稅率を適用せんとしたのである。このことは日本および支那をして佛印からの輸入品特に米に對して報復關稅を賦課せしめる結果となり、佛印米の東亞市場への輸入は之によつて益々困難となり、本國への依存度を高めることゝなつた。

いま、キルシエ關稅實施後の米輸出の情況を左表に就いて見よう。

單位—千瓲

		一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二	一九三三	一九三四	一九三五
佛蘭西及び屬領	輸出量	二〇八	二四五	三〇九	三七七	六〇六	七八三	四六九
	比率	一八・三	三・八	三二・二	三六・〇	四七・〇	五一・七三	二六・六
外國	輸出量	九三四	八七七	六五〇	七七七	六八三	七四六	一二九七
	比率	八一・七	七八・二	六七・八	六四・一	五三・〇	四八・七	七三・四
合計	輸出量	一一四二	一一二二	一一二四	一二一一	一二八九	一五一九	一七六六
	比率	100・0	100・0	100・0	100・0	100・0	100・0	100・0

		一九三六	一九三七	一九三八	一九三九
佛蘭西及び屬領	輸出量	一一六一	八二八	六五五	五一八
	比率	六五・一	五三・五	六五・〇	四一・三
外國	輸出量	六二〇	七二〇	四〇九	七三三
	比率	三四・九	四六・五	三五・〇	五八・七
合計	輸出量	一七八一	一五四八	一〇六四	一二五一
	比率	100・0	100・0	100・0	100・0

佛印米輸出先別に於いて、フランス及び屬領の占めた割合は古く一九一三年には二四%、一九二三年には一七%、二四年に一一%、二五年に一三%、二六年も同じく一三%、二七年に一四%、二八年に一六%であり、其後は右表に示した如く一九二九年までは大體從來の一五%見當を維持してゐたが、キルシエ關稅の發効と共にフランス本國および屬領の占める地位は次第に上昇し、一九三六年に於いて六五%を記錄して絶頂に達し、其後は佛印輸出の絶對量の減少と共にフランスは絶對的にも相對的にも減退を示すに至つてゐる。

本國へ輸入される佛印米はその八〇%が家畜および家禽の飼料に供せられてゐるのであるが、一九三七年にフランスが輸入した食用以外の二次的穀物二二〇萬瓲のうち佛印米の輸入はその三分の一の七〇萬瓲であるから、家畜および家禽の飼料として五六萬瓲が消費されてゐるわけである。なほ之に印度支那產玉蜀黍の輸入五〇萬瓲を加へるならば、フランスの穀物輸入に於いて印度支那は實にその五七%を供給してゐる狀態である。

印度支那米のこのやうな多量の輸入が、フランス本國の小麥生產者の猛烈な反對運動を惹起せしめたことに就いては既に一言したが、併し事

實は食料用として消費された佛印米は全輸入量の約一〇％に過ぎなかつたのであるから、この點はあまり重要な問題とはならなかつたやうであつて、寧ろこれは小麥生產者が小麥の變種によつて飼料用小麥を作り、もつて佛印米に對抗せんとしたものゝやうである。とにかく印度支那米は本國市場に於いてこのやうな困難に逢着したのであるが、これは一應、別としても佛印米が本國にあまり多く依存することの危險性は早くから指摘されてをり、地理的環境から言つても印度支那に近い東亞市場を開拓する必要が不可缺のものとして多くの人々により主張され來つたやうである。

(二)、支那市場

一九四〇年に至るまで佛印米の東亞への輸出が支那市場を中心として行はれてゐることは既に述べた。印度支那經濟時報の示すところによれば、一九三七―八年の支那の外國米輸入は次のごとくである。

外國米全輸入　單位―數量＝千キンタール　價額＝海關金單位

	一九三七年		一九三八年	
	數量	價額	數量	價額
	三、四五七	一七、九八五	四、〇六一	二四、八四二
佛印米	一、八三七	九、四四九	一、〇四四	六、三五一
泰米	一、一〇一	五、六七三	一、八五九	一〇、四二二
ビルマ米	五〇一	二、七六一	七五三	四、五三七
日本米	一	一一	一五七	一、三六七

即ち一九三七年に於いては支那の外國米輸入三四萬瓲（香港を除く）のうち佛印米は一八萬瓲を占めて五三％に當り、泰米が之に次いで一一萬瓲で三一％、この他ビルマ米の五萬瓲、日本米の百瓲といふ順である。翌三八年には外國米輸入量は一九三七年の三四萬瓲から四〇萬瓲へと增加を示したが佛印米の輸入は逆に一八萬瓲から一〇萬瓲へと減少を示し、全體中に占める割合も二五％となつたが、之に代つて泰米の進出が著しく四五％の十八萬瓲に上るに至つた。

支那は一大農業國であつて年產五千萬瓲に上る米の生產國であるにも拘はらず、なほ且つ外國米の輸入を仰がねばならないのは、主として天災並に打續く戰亂に起因するものと考へられる。從つて新支那の建設と共に外米輸入がいづれは減少するに至るであらうことは容易に推測されるところであつて、この意味よりして佛印米にとり支那市場は必らずし

も確實な輸出市場と言ふことを得ない。事變勃發後今日までの佛印米輸入の趨勢は次の如くである。（印度支那外國貿易一覽表および統計月報）

	數量（瓲）			價額（千法）		
	一九三七年	一九三八年	一九四〇年七月マデ	一九三七年	一九三八年	一九四〇年七月マデ
支那	一二五四八八	一八四二三	八四七七八	一九五四一八	一七七八〇	八二五八九
外ニ雲南	一三	一	二三九七	一三八七八	一四	一
香港	三一九一〇六	一七四二四〇	一六〇九五一	三〇八〇三二	二一〇六二七	一六六三七六
計	四四四六〇七	一九二六六四	二四八〇二六	五一七三三八	三二二二二	一八四一五七

香港を加へての支那の佛印米輸入は年額四五萬―五〇萬瓲に達するが支那事變の進展と共に佛印米の輸入經路は漸次、雲南、香港を通ずるルートへと移行してゐる。

(三)、日本市場――結び。

一九三六年以降三箇年の日本の外米輸入は次のごとくである。

（大藏省、外國貿易月表）

	數量（百斤）			價額（圓）		
	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三六年	一九三七年	一九三八年
支那米	四	三	—	一六	三三	—
ビルマ米	九三八七八	八九八四	一二六	六五五八四	六八三五二	三一三〇
佛印米	三一五九五	二八〇四一	八四二	二一二一三四	三〇七六五九	五六二六
泰米	八八二〇一八	五二〇五九〇	三七七二八七	四八二〇一一九	三七五六九五	二七九六二〇
其他	三三	四	二〇	二一八	三七	四一五
合計	九二三二三七	五五七六二二	三七八二七五	五〇九八〇七一	四〇三二九七六	二八〇七九一

即ち一九三六年には總輸入高九千萬斤、石にして三十六萬石、その內泰米が九五%を占め、佛印米は三百萬斤で、全體の三、三%に過ぎない。輸入は全體として一九三六年から一九三八年にかけて漸減の傾向にあり、九千萬斤から五千萬斤、三千萬斤へと減少し、價額も之に隨つて一九三六年の五百萬圓から四百萬圓、二百萬圓と減退してゐるが、その間を通ずる泰米、佛印米、ビルマ米、支那米の相對的地位は殆んど不變である。

佛印米に就いて言ふならば、既に示したごとく一九四〇年に於いて、日本の輸入は著しい增加を見せるに至つて居り、一九三九年の七千瓲か

ち一躍して三十四萬瓲と約五〇倍の増加となつてをり、石に換算すれば實に二百二十萬石の多額に及んでゐる。これは昭和十四、五年を發端とする我國の外米輸入の増加に由るものであることは言ふ迄もない。

第一次世界大戰前より最近までの我國の佛印米輸入の推移は次のごとくである。（印度支那統計年鑑一九一三―二二、以後一九三七―三八まで）

單位―千瓲

一九一三年	一九一四年	一九一五年	一九一六年	一九一七年	一九一八年	一九一九年	一九二〇年	一九二一年	一九二二年	一九二三年	一九二四年
一〇七	一〇〇	一	〇・三	九五	三五四	二四〇	二二	一〇四	五四	三八	八二
一九二五年	一九二六年	一九二七年	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年
二五三	一六六	一八一	一二〇	四八	三三	〇・五	六〇	一・〇	〇・九	三	一
一九三七年	一九三八年	一九三九年	一九四〇年（七月マデ）								
一	〇・二	七	三四三								

西貢米の日本向輸出は一八八五年に始まると言はれてゐるが、その後

一九一三年に至るまでの期間は數量も極めて少く、僅かに一八九八年と一九〇八年との兩回に於いて十萬瓲臺を實現したに過ぎなかつた。その後一九一三年、一四年に於いてそれぞれ十萬瓲程度の輸出を見たが、大戰の勃發と共に閉息し、更に一九一八年に日本の米騒動による外米買付斷行のために三五萬瓲の輸出を見た以外は一般に沈滯を續けてきた。ところが一九二〇年の恐慌以後一九二二―一九二九年の恢復および昂揚の時代に日本の工業化政策が進展すると共に、佛印米の輸入も増加し、一九二五年の二五萬瓲、二六年の一六萬瓲、二七年の一八萬瓲、二八年の一二萬瓲と言ふ經過を示したが、前記キルシエ關税の設定によつて日本工業品の佛印輸入が阻止されると共に之に對する日本の報復策は西貢米輸入の禁壓といふ方面を採り、一九二九年以後は前掲表の示すがごとき減退を示すに至つた。この情勢は一九三二年の我國と佛印との關税協定成立後と雖もなんらの恢復を見せなかつた。然るに一九三九年九月以來の第二次世界大戰の勃發によつて、佛印は米の最大の輸出市場たるフランス本國を喪失することゝなり、こゝに東亞市場開拓の問題が焦眉の問題として採り上げられるに至り、一方我國の佛印米の輸入確保が緊急の問題となるに至り、こゝに昭和十六年五月の日・佛印經濟貿易協定が

成立したのである。

今後、我國が幾何の外地米とくに西貢米の輸入を必要とするかは、我國の内地産米量と朝鮮・臺灣よりの移入量との合計に國内消費を考慮して決定される事柄であるが、とにかく西貢米の輸出が年々百五十萬瓲すなはち約一千萬石に及んでをり更にそれ以上の輸出能力を有すること、又近年それが東亜各地の需要を渇望してゐること等の事實こそは我國の最大の關心の的たるを失はないであらう。たゞ西貢米がその生産から輸出に至るまで華僑の手によつて支配されてゐるところに、微妙な問題が存するわけである。

附錄第一

佛印米品種別輸出表　單位、數量—百瓩　價格千法

一、國名中單に佛蘭西、和蘭とあるは其の本國を示す

二、各國の合計と合計欄の數字と幾分差異あるも何等かの理由ありと思はるゝにより原資料の數字を其儘示す

	數量			價格		
	一九三七	一九三八	一九三九	一九四〇 七月マデ	一九三七	一九三八	一九三九	一九四〇 七月マデ
一、籾								
佛蘭西	六〇四六四五	三〇一三〇八	一九八三三五	一三七	三四一五一	二二〇九六	一二〇四七	二
ベルギー	五〇二二	—	—	—	二九三	—	—	—
和蘭	九七二六五	四六八四八	八四四七三	—	四五六四	三一五六	五一三八	—
支那	一〇九〇四	—	二七八	五六	四六〇	—	一六	四
雲南	—	—	二	—	—	—	—	—
香港	六四七五三六	九一一三	二六三九二	四〇六二	二八〇五五	五七四	一七一八二六	一五九四
英領印度	二八三一四	一三六六四	二八七五三七五	五五七一五二	一四八四	八三四	一〇一九	四〇九六二
英領以外の印度	—	—	一六五八五	—	—	—	—	—
セイロン	—	—	一〇一六三	—	—	—	九二〇	—
泰	—	—	九五四五	—	—	—	四七〇	—
シンガポール	二五一七	四五一	二二〇二	五四三一	一一九	二二	一三六	三九九
ソノ他アジア	一〇五	—	六四〇	—	五	—	三七	—
佛領アフリカ	—	—	三〇五七	—	—	—	一九八	—
船舶用	四	六	—	六九九	—	—	—	五三
仕向地未確定	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	一四一四〇六四	三八〇二九四	三三六四四七	五六七四六一	七〇二四九	二七二五〇	一九五四三〇	四一七〇七
二、玄米								
三%以下の籾を混入せるもの								
佛蘭西	三二一六九五	三七九三七三	四〇五八一五	七六八一三	二三四二六	三五六二二	三〇三六二	五四四八
獨逸	一二五二五三	一六一〇二七	一二九九九六	—	八九八〇	一五六二七	九九〇六	—

蘭領印度	英領印度	英領香港	英領南阿	英領西阿	佛蘭西	白米	三混合	三混合人を以せる上もの	合計	ニューカレドニア	佛領アフリカ	佛領ソノ他アジア	廣州灣	シンガポール	香港	支那	和蘭	伊太利	ベルギー
三	二	一〇五	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

日本	一三五〇	二〇〇一	一七七一五四	三四三六六二	九九七	二一六	六四五九	四二六九六〇
比律賓	一	一四六九二九	七七二三一九	六七〇二一	一	一七〇九五	七三六七五	七五六七
泰國	五七九〇	二七七一八	八五八八四	一〇一一〇	四八五	六九九八	七九五五	二四〇二
仏領印度支那	一〇	六六	二六	一一	三三九五八	七	二	一
伊蘭	二七二六一四	三三二〇九七	三〇三九二六	一一五六〇四	五七九	三三九八二	二八〇九五	一六一二〇
土耳其	七六一一	六九八〇	五七〇二	一	三五六二	七七〇	四三六	一
ソノ他亞細亞	三三八三四	三二七六四	四三六四八	二三六三七	三五六三	三三八九	四三七八	二六一五
阿剌比亞	一三四一六六	二五二〇九二	二八二二六	五〇一六四	一〇〇五七	二六九七八	三六九〇	六九二五
南阿聯邦	五四一九二	一四〇一二	七六九五八	五四三四	四二二〇	三六二四	七四五九	六五三
ポルトガル領東アフリカ	六九七六	三四七二	八〇四	六	四六一	二七二	一七二	一
ニヤサランド	二六九七一一	一九五九六	四一九二九三	一六三六五	二二九四九	二二〇四	四二二一三	一九四〇三
モロッコ	一	二〇〇一	一二四三九	一	一	一一五	二〇六一	一
チュニス	一	五三四二三	四五三四九	一	一	五七二七	四二五七	一
仏領西アフリカ	一	三〇九〇四	一〇六七一七	三四四九一	一	三五三三	九九三四	四一四七
ソノ他仏領アフリカ	二二五七三	七〇七一六	四七二〇七	二八三九一	一七六九六	七一八六	四二二五	三五九二
ゲンドルゴ及ビソノ他ノ	三九〇二一	二六四三五	五〇一七九	一	三〇六七	三九五〇	三八九九	一
キューバ	六〇〇〇	一四〇〇〇	三七四七七	三五四〇	五四四	二四四五	三四三二	三五〇
智利	一	一	一	四六〇〇	一	一	一	六三四
濠洲	四〇七四二	四二七二二	一二一四一	三九一二	三六〇九	四八六七	二〇九五	四八〇
ニユーカレドニア	二八五七四	二三三六七	四三二八八	二七一一七	二二一三	三六二五	三九七七	三三四八
ニユーブリデス	一七二〇〇	七〇六一	一四六四八	九七七〇	二四九三	八二三	二三五九	二二一〇
ソノ他大洋洲諸領地	二〇〇〇	一	三一五	五五九三	九六	一	二八	六九三四
ソノ他大洋洲領土	六七六七六	五二一〇九	一四〇四五	二九〇一	五〇九九	三三九八	一〇八一三	二二六
廣東灣	七七七	二	一七五八〇	二三二〇七	五五	〇	二二五一	三七〇五
船舶用	三八一四	九八七	五一一八	六九〇六	二二九	一〇〇	四八四	八七三
仕向地未確定	二〇八九四四	二五八六九	一六二四三	一〇〇〇八	一八五八五	二六七一九	二四六九	二一六六
合計	九〇六三五八	六七六〇五一	九四九七五九一	八五三二六二	七一九一四九	七一六四二二	九〇三七七	二一〇〇二六七
蒸したるもの	一	三三二一	二〇四一四二	二二七四三	一	三七八一	一五八二	一五八二

四、碎米

蒸さざるもの	一、三九七七〇四	一〇四〇四八四	八四四〇八三	大九一四〇	九六八三三	七〇五四五
佛蘭西	大〇九〇〇	—	一四九九七	—	四〇六一	—
獨逸	三五二二	五〇三七	一六八二三	—	二一九	四六五
ベルギー	—	—	—	—	—	—
ギリシヤ	—	—	一九一六六八	四三〇五六	六二一七	六二九五
英國	九七三三三	九七三三三	—	—	—	—
伊太利	—	—	三〇九九九	四六七四三二	四三九九	三八三五
和蘭	七三一六六	四〇六〇〇	一二五〇四二	—	三一〇	三六七四
支那	四二六一	四一三〇三	七八九七二	五三一三五五	一二二八五	二三五五
香港	二〇四三三七	—	七六四〇二	八九三七二	五四四二	一八八
セイロン	七五〇四三	二五四五七	三九七九九	七〇一四〇	一八五一	一七〇三二
シンガポール	二六五九四	二〇六〇	二五〇〇	—	四六一	九一
アルヂエリア	八〇〇五	一二〇七三	一八〇三	—	—	一七〇九
モロッコ	—	一〇〇一	一九九九	五六二五一〇	—	二七三二
チユニス	三四一二五	一三二二五七	五三二六二七	三七六四	五七〇五八	—
佛領西アフリカ	—	二八七四五八	二七五二	一〇一八	—	—
ソノ他佛領アフリカ	八五六四八〇	—	—	—	—	—
ソノ他アフリカ	—	—	—	—	—	—
ニューカレドニア	—	—	—	—	—	—
仕向地未確定	一六八五六四	七五〇四五	一四五二八	二八九五一五四	一二九八六	一四四五七
合計	三〇二五〇四二	一七六九〇七六	二一一六三五六	—	二〇八〇七七	一七〇三二
蒸したるもの	—	—	—	—	—	—
五、米粉						
佛蘭西	四八二三四〇	四七七九〇九	一七六六一六	九一五	一八九二六	二四八六一
ベルギー	八九九九	五二五六六	—	—	三〇五	三〇七五
英國	三一一五一二	三〇三九二二	五六〇〇九七	—	一三二四四	一六二三七
和蘭	二五五一二	二九四九九	四二九四三	—	八三五	一四八五
支那	八	〇	一〇二	—	〇	〇

蒸さざるもの	六六八一三	六五〇一				
佛蘭西	一三三三	—				
獨逸	一一八〇	—				
ベルギー	—	—				
ギリシヤ	一四二四五	四二七四				
英國	—	—				
伊太利	一五二〇	—				
和蘭	一〇三七五	四五八五六				
支那	六三〇九	五一四〇九				
香港	五九九三	八七二四				
セイロン	三〇四二	六八三五				
シンガポール	一九三	—				
アルヂエリア	一三六	—				
モロッコ	六七九	—				
チユニス	三八八六四	五三二三八				
佛領西アフリカ	二一〇	三三八				
ソノ他佛領アフリカ	—	九八				
ソノ他アフリカ	—	—				
ニューカレドニア	—	—				
仕向地未確定	一六三五三一	一八二八六三				
合計	一〇四〇	一六				
蒸したるもの	—	—				
五、米粉						
佛蘭西	七四四〇	一六				
ベルギー	—	—				
英國	二二四九六	—				
和蘭	一七七二	—				
支那	四	—				

香港	三七一〇六七	八四八五	二五四四九	一四八三三〇	九六七〇	四三一〇	一〇六四
日本	一	一	一	一	一	一	一
シンガポール	三三〇八四九	四一七三八	六七〇九九	三四〇〇七五	八四三一	二一三八	二五三九
他アジア	一	六九	三二七五〇	一二〇九六	一	四	一〇〇四
ダガスカル	〇	〇	二四	一	〇	〇	五
ニオン	一	三	一〇三三	一	一	〇	八六
向地未確定	二五三四	二七八〇	一	一	七四	一九〇	一
合計	一二三二八〇六	一〇〇一三二八	九三一二三三	五〇一三一三	五一四八五	五二五六四	三七四三八
米及び同製品合計	一五四七二五九	一〇六四六四三〇	一六九三一四三	一二七八五一七六	一〇九三八一七	一〇一九八六三	一三八五八八二

附錄第二

佛印米輸出數量および其の輸出先別表（單位一〇〇瓩）（　）ハ比率ヲ示ス。

	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年	一九四〇年（七月マデ）
佛蘭西	九、八三〇、四三三（五五・八）	六、六八八、三二六（四三・二）	五、四三五、五六〇（五四・〇）	四、五五四、七一九（二七・〇）	九〇六、二〇六（七・一）
獨逸	一九五、六二六（一・〇）	一八八、八四六（一・二）	一九一、四七七（一・八）	一四四、九九三（〇・八）	—
ベルギー	七五、八五五（〇・三）	二二、〇九五（〇・一）	五八、六〇二（〇・四）	一七、三三七（〇・一）	—
スペイン	—	—	—	—	—
英國	三五一、九〇五（二・〇）	四〇八、八四五（二・六）	三八〇、〇二七（三・七）	七七一、八六七（四・五）	三八四、〇九九（五・〇）
伊太利	一三、六三四（〇・一）	—	一五、九七一（〇・一）	八、〇〇六（〇）	四三、〇五六（〇・三）
和蘭	二一五、二三三（一・二）	二二二、六九一（一・四）	九二、三四四（〇・九）	二九五、二八五（一・七）	—

支那	五四七、七三〇	一、二五四、八八〇	十八四、二三六	八四七、七八四	一、九五四、一八六
	（三・一）	（八・〇）	（一・八）	（五・一）	（一五・三）
雲南	三二	一三〇	一〇	二二、九七七	一三八、七八四
	（〇）	（〇）	（〇）	（〇・一）	（一・一）
香港	二、三四七、〇四〇	三、一九一、〇六七	一、七四二、四〇一	一、六〇九、五二一	三、〇八〇、三二八
	（一三・三）	（二〇・七）	（一六・七）	（九・〇）	（二四・〇）
英領印度	九四六、〇六〇	四三、九〇二	二二、三八七	三、七一九、四九三	一、〇七五、四三四
	（五・三）	（〇・三）	（〇・二）	（二二・〇）	（八・四）
蘭印	一八七、六八九	八六、四二五	二二五、五〇四	三六三、八八四	二七、三二四
	（一・〇）	（〇・六）	（二・二）	（二・一）	（二）
英領印度以外	六、二三六	二	――	三八、九七〇	――
	（〇）	（〇）		（〇・二）	（〇）
日本	二八、九三七	一三、三〇八	二、〇〇一	七七、二九八	三、四三六、六八八
	（〇・一）	（〇・一）	（〇）	（〇・四）	（二六・九）
比律賓	五七一、八二〇	――	一四八、六〇一	七七一、三一六	六七、〇七一
	（三・二）	（〇）	（一・四）	（四・五）	（五）
セイロン	四七、〇五〇	八〇、八三三	八七、六六八	二九〇、〇九三	一五〇、三五八
	（〇・二）	（〇・五）	（〇・八）	（一・七）	（一・一）

泰	四、〇八〇	一〇	六六	九、六九一	――
	（〇）	（〇）	（〇）	（〇・一）	（〇）
シンガポール	三一九、一九三	五五六、二四二	二六八、一八一	四九六、七二一	五九四、〇三六
	（一一・八）	（三・六）	（二・六）	（三・〇）	（四・六）
シリヤ	八、三四六	七、六一一	六、九八〇	五、七〇二	――
	（〇）	（〇）	（〇）	（〇）	（〇）
廣州灣	一、〇一九	七八二	二	一八、六六二	二七、八〇七
	（〇）	（〇）	（〇）	（〇・一）	（〇）
ソノ他アジア	四三、九〇四	三三、九六二	三一、八三三	四四、六九四	四六、〇一六
	（〇・二）	（〇・二）	（〇・三）	（〇・二）	（〇・三）
アルジエリア	一四七、六八四	一三二、一七一	二六三、一六四	二四、九二九	五〇、一六四
	（〇・八）	（〇・八）	（二・六）	（〇・一）	（〇・四）
南阿聯邦	六五、七九一	五四、一九二	一四、〇一二	七七、五八二	九、四五五
	（〇・四）	（〇・三）	（〇・二）	（〇）	（〇・一）
マダカスガル	一九、八〇七	七、〇〇七	二、四二三	六、六〇五	六
	（〇・一）	（〇）	（〇）	（〇）	（〇）
レユニオン	三三二、九九五	二六九、七一一	一九五、九九九	四一八、四五四	一六三、六六五
	（一・九）	（一・七）	（一・九）	（〇）	（一・二）

テユニス	— (〇)	三四、一二五 (〇・二)	一八四、六八〇 (一・七)	五三、三四八 (〇)	— (〇)
モロッコ	— (〇)	— (〇)	二、〇〇三 (〇)	一二、九四一 (〇)	— (〇)
佛領西アフリカ	— (〇)	—	三、二一九 (〇)	六三八、五四四 (〇)	六〇六、〇〇一 (四・七)
ソノ他佛領アフリカ	一、〇八八、四九〇 (六・一)	一、〇八二、五三四 (七・〇)	九四、六三一 (〇・九)	九九、七九一 (〇)	四二、四五一 (〇・三)
ソノ他アフリカ	四八、六七五 (〇・二)	三九、〇二二 (〇・二)	二六、四三五 (〇・二)	四二、四三七 (〇)	四、六六五 (〇)
米國	— (〇)	〇 (〇)	— (〇)	五、〇六〇 (〇)	— (〇)
キューバ	四六、一〇七 (〇・二)	四八、九〇九七 (三・一)	八二、〇〇〇 (〇・八)	四一三、〇九四 (一)	二、五四〇 (〇)
ダトルブ及マルチニク	二〇、三五三 (〇・一)	六、〇〇〇 (〇)	一四、〇〇〇 (〇・一)	三七、四七七 (〇)	— (〇)
チリー	— (〇)	— (〇)	— (〇)	— (〇)	四、六〇〇 (〇)

濠洲	三一、五二九 (〇・二)	四〇、七四二 (〇・二)	五五、四七四 (〇・五)	一二、一四一 (〇・一)	三、九一二 (〇)
ニューカレドニア	二七、四二三 (〇・一)	二八、五八六 (〇・一)	二三、五六七 (〇・二)	四三、二八九 (〇・二)	二七、三一六 (〇・二)
ニューヘブリデス	六、八三〇 (〇)	一七、二〇〇 (〇・一)	七、〇六一 (〇)	一四、六九八 (〇・一)	九、七九八 (〇・一)
ソノ他大洋洲佛領地	—	一、〇〇〇 (〇)	— (〇)	七一五 (〇)	一、九〇一 (〇)
ソノ他大洋洲諸島	七一、一九四 (〇・四)	六七、六七六 (〇・四)	五一、一〇九 (〇・五)	一一七、〇九三 (〇・七)	五五、九七三 (〇・四)
船舶用	二、〇〇二 (〇)	二、八一八 (〇)	九九四 (〇)	六、〇九〇 (〇)	一〇、四〇四 (〇・一)
仕向地未確定	— (〇)	三八五、五三二 (二・五)	一五一、六一〇 (一・五)	八四、六〇三 (〇・五)	一〇、〇〇八 (〇・一)
總計	一七、六三〇、四四一 (一〇〇・〇)	一五、四七二、五五九 (一〇〇・〇)	一〇、六四六、四三〇 (一〇〇・〇)	一六、九二一、五四三 (一〇〇・〇)	一二、七八五、一七六 (一〇〇・〇)

附錄第三

佛印米輸出金額およびその輸出先別表（單位—千法（　）ハ比率ヲ示ス。）

	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年	一九四〇年七月マデ
佛蘭西	四四四、五二二（五八・二）	四六四、九八八（四二・二）	五二一、七七四（五・一一）	三九一、四九八（二八・二）	一〇六、六七六（七・五）
獨逸	六、八〇六（〇・八）	一三、二九四（一・二）	一八、八八〇（一・八）	一一、一三九（〇・八）	—（〇）
ベルギー	二、一八四（〇・三）	一、一三四（〇・一）	三、六六二（〇・三）	二、四六二（〇・一）	—（〇）
スペイン	—	—	—	—	二七、二三三（一・九）
英國	八、六二五（一・一）	一九、四六一（一・七）	三三、五三二（二・二）	三七、五九四（二・七）	四、二七四（三）
伊太利	五二一（〇・一）	—	一、八一〇	五六六	—
和蘭	七、六八三（一・〇）	一一、六四二（一・〇）	六、三〇一（〇・六）	二〇、八四二（一・五）	—（〇）

支那	二四、六〇五 (三・二)	一一、五七一 (一・〇九)	一七、七八〇 (一・七)	八二、五八九 (六・〇)	二三五、六九四 (一六・〇)
內雲南	一 (〇)	一四 (〇)	一 (〇)	一、〇五一 (〇・一)	一四、九五〇 (一・一)
香港	九三、五三九 (一二・二)	二一〇、六二七 (一九・一)	一六六、三七六 (一六・三)	一八七、〇〇五 (一三・五)	三三七、四四五 (二三・九)
英領印度	二七、二九四 (三・五)	二、六八五 (〇・二)	一六、九三九 (一・六)	二五八、三五三 (一八・九)	一〇五、八六七 (七・一)
蘭印	七、一七六 (〇・九)	八、二一八 (〇・七)	二五、二九七 (二・五)	三三、八〇三 (二・四)	三、七三二 (〇・二)
英領以外印度	二一三 (〇)	〇 (〇)	— (〇)	二、六五三 (〇・一)	— (〇)
日本	一、四一三 (〇・二)	一、〇六七 (〇・一)	二一六 (〇)	九、四六九 (〇・六)	四二八、九六〇 (三〇・五)
比律賓	二八、〇〇一 (三・六)	— (〇)	一七、一八六 (一・六)	七二、八七一 (五・二)	七、三八七 (〇・五)
セイロン	二、二六四 (〇・三)	五、九二七 (〇・五)	九、〇四二 (〇・九)	二六、一三三 (一・一)	一六、七七一 (一・二)

泰	一一九 (〇)	一 (〇)	七 (〇)	四七七 (〇)	— (〇)
シンガポール	一四、五九一 (一・九)	三五、四八六 (三・二)	二六、五九三 (二・六)	四九、一五〇 (三・五)	三二、七〇五 (二・三)
シリヤ	四一六 (〇・一)	五七九 (〇・一)	七七〇 (〇・一)	五三七 (〇)	— (〇)
廣州灣	四三 (〇)	五五 (〇)	〇 (〇)	一、五五五 (〇・一)	三、一〇一 (〇・二)
ソ他アジア	一、九八八 (〇・二)	二、五六九 (〇・二)	三、三九二 (〇・三)	四、四三三 (〇・二)	三、〇七七 (〇・二)
アルジェリア	七、五〇二 (〇・九)	一〇、四九八 (〇・九)	二八、四八七 (二・八)	二、三四四 (〇・一)	六、九一五 (〇・五)
南阿聯邦	三、二七〇 (〇・四)	四、二二〇 (〇・四)	一、六二四 (〇・一)	七、五一八 (〇・五)	一、一一三 (〇・一)
マダガスカル	一、〇二八 (〇・一)	四六三 (〇)	二七二 (〇)	六一三 (〇)	一 (〇)
レユニオン	一七、九一二 (二・三)	二一、九四九 (二・〇)	二一、二〇四 (二・一)	四一、五七五 (三・〇)	一九、四〇三 (一・三)

チュニス	— (〇)	二、七三二 (〇・二)	一六、七六〇 (一・六)	四、九三七 (〇・二)	— (〇)
モロッコ	— (〇)	— (〇)	二〇五 (〇)	一、一九六 (〇・一)	五八、三五六 (四・一)
佛領西アフリカ	— (〇)	七六、七六九 (七・〇)	三二二 (〇)	四九、八〇一 (三・五)	〇 (〇)
ソノ他佛領アフリカ	四九、八八三 (六・三)	三、〇六八 (〇・三)	九、一一七 (〇・九)	八、八二四 (〇・六)	五、〇〇九 (〇・三)
ソノ他アフリカ	二、一七四 (〇・三)	—	二、九五〇 (〇・二)	三、九九四 (〇・二)	五二六 (〇)
米國	— (〇)	〇 (〇)	— (〇)	四八四 (〇)	— (〇)
キューバ	二、〇七八 (〇・二)	三八、四九六 (三・五)	八、八〇四 (〇・八)	三七、五三六 (四・三)	三五〇 (〇)
グアドルプ及ルヴニク	九四六 (〇・一)	一四四 (〇・一)	一、四四五 (〇・一)	三、四三二 (〇・二)	六三〇 (〇)
チリー	— (〇)	— (〇)	— (〇)	— (〇)	— (〇)

濠洲	一、六四八 (〇・二)	三、六〇九 (三・三)	六、〇二五 (〇・六)	一、〇九五 (〇・一)	四八〇 (〇)
ニューカレドニア	一、四七六 (〇・二)	二、二一三 (二・〇)	二、六二五 (〇・三)	三、九七八 (〇・二)	三、三七〇 (〇・二)
ニューヘブリデス	三四一 (〇)	一、四九三 (一・三)	八二三 (〇・一)	一、三六〇 (〇・一)	一、二一二 (〇・一)
ソノ他大洋州佛領地	— (〇)	九六 (〇)	— (〇)	六〇 (〇)	二二六 (〇)
ソノ他大洋州諸島	三、五二一 (〇・四)	五、〇九九 (〇・四)	五、三九八 (〇・五)	一一、〇六八 (〇・八)	大、九三四 (〇・五)
船舶用	一〇二 (〇)	二二九 (〇)	一〇一 (〇)	五五三 (〇)	一、二三六 (〇・一)
仕向地未確定	— (〇)	三二、〇〇〇 (二・八)	三六、一九三 (三・五)	六、一三五 (〇・四)	一、一六六 (〇・一)
總計	七六三、九〇四 (一〇〇・〇)	一、〇九三、八一七 (一〇〇・〇)	一、〇一九、八六三 (一〇〇・〇)	一、三八五、八八二 (一〇〇・〇)	一、四〇九、八三〇 (一〇〇・〇)

昭和十七年三月廿二日　印刷
昭和十七年三月廿五日　發行

發行者　東京市神田區駿河臺二ノ一
東亞研究所內
發印刷者　伊藤斌
印刷所　東京市神田區駿河臺二ノ一
東亞研究所

發行所　東京市神田區駿河臺二ノ一
財團法人　東亞研究所

55
チュニス
(0)
二、七三二 (0.三)
一六、七六〇 (一.六)
四、九三七 (0.三)
(0)
17. 4. 9